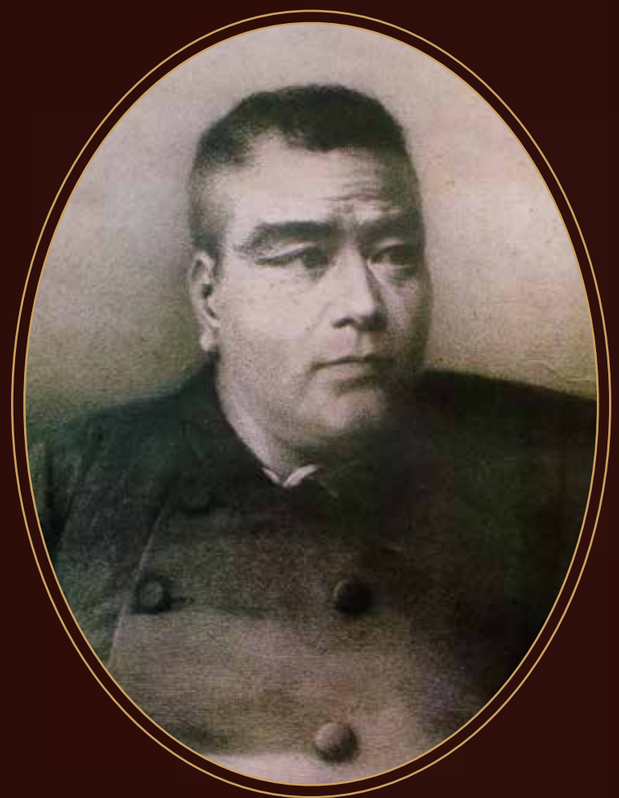
特別展

逸話の中の南洲翁



《開催のご挨拶》「逸話」（＝世人にあまり知られていない興味ある話）の多くは口承伝承であることから、中には曖昧なものや、記憶違い等から事実と異なる内容を含んだものも存在します。しかしそれを理解した上で、歴史事象と合わせて読み解けば、その人物に対する理解は格段に深まります。
西郷南洲翁にまつわる逸話を通して、現代人が失いつつある美徳や人を思いやる心を再認識し、南洲翁への関心や理解を深められるとの思いから、この特別展を開催いたします。

令和5年 10月3日 火 ～ 令和6年 1月14日 日　◆会場◆鹿児島市西郷南洲顕彰館

《紹介する逸話》

「母の教え」
「弟をもって兄とす」
「翁と川口雪篷」
「小松、西郷の結婚媒酌人となる」
「ウド眼　ウドサァ」
「書物の虫と活学問」
「横山安武の死諫」
「西郷南洲翁と菅臥牛翁」
「老人の車の後押し」
「辞職、離京」
「児孫ノ為ニ美田ヲ買ハズ」
「隆永という名乗りについて」
「周到な外交手腕」
「あれを貰ってこないか」
「歩哨に立つ陸軍大将」
「牛牛狐狐」
「翁の服装と諧謔（かいぎゃく）」
「敬天愛人は克己に始まる」
「人間離れ ― 天空海濶」
「西郷さん札」
「桐野利秋の評」
「浄光明寺南洲墓地」
「うちの人はこげな人じゃなか…」
等々

《紹介する逸話の出典》

「南洲翁逸話」鹿児島縣教育會発行
「大西郷の逸話」西田実 著
「南洲百話」山田準 著
「西郷どんの逸話」西郷隆盛公奉賛会発行
「横山安武伝記並遺稿」河野辰三 著
「臥牛　菅實秀」加藤省一郎 著
「南洲翁遺訓に学ぶ」（公財）荘内南洲会発行
「幻の宰相 小松帯刀伝 上巻」瀬野富吉 著
※一部抜粋編集も含む

特別展　講演会《14：00 ～ 15：30》

●11月11日（土）徳永和喜 館長「西郷南洲翁逸話」
●12月 9 日（土）糸野陽子 氏「大久保利通の人物像 ～逸話・談話を中心に～」

鹿児島市 西郷南洲顕彰館

■住所：鹿児島市上竜尾町 2-1　■TEL：099-247-1100
■開館時間：午前 9 時～午後 5 時（入館は午後 4 時 40 分まで）
■入館料：一般 200 円、小・中学生 100 円、団体 20 名以上 2 割引
■休館日：毎週月曜日（祝日の場合は翌平日）、12/29 ～ 1/1

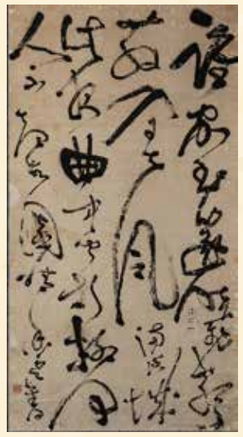
時任鵬熊筆 西郷南洲肖像 複製
（原資料：黎明館蔵）

ウド眼　ウドサァ

大西郷は巨眼、巨躯、その奥底に無限の慈愛を宿していた。明治の頃で身長は5尺9寸8分（1.8m）、体重 29 貫（108kg）。まさに大相撲の横綱大関格の堂々たる体格である。これは西郷家の伝統、特に祖父ゆずりのものらしい。この人は「無敵吉兵衛」とあだ名され、当時の剣客大山角五郎の門下で、怪力をもって藩中に聞こえ、薩摩に来た江戸力士の九紋竜という小結と相撲をとって引き分けになったという話もある。隆盛の相撲好きもこの祖父ゆずりのものらしい。幼少の頃から身体は人一倍ずば抜けて大きく、眼も大きかったので、「ウドサァ」（肥大した人）とか「ウド眼」（巨眼）と呼ばれ、動作挙動がのっそりと遅く、口数も少なく、けた外れの落ち着きぶりだった。

翁と川口雪篷

翁は川口雪篷と親しくせられた。川口は翁より10 歳ばかり年長である。陽明学を修め、書がうまい。共に胸襟を開いて古今の盛衰興亡を論じ、朝より暮に至りて尽きなかった。川口は磊落不羈（度量が広く豪快で、かつ非凡な才能を持っていること）小事に齷齪せず、翁と大いに気が合い、頻々来りて翁のために薪水の労を取り、暇あれば談論風発、疲れれば園外に仮睡した。翁嘗て川口に申されるには、足下暇あればよく昼寝をする。今より睡眠先生の雅号を呈しようと。雪篷これを快諾し、自ら睡眠と称し、後に酔眠と改め、交情益々加わる。



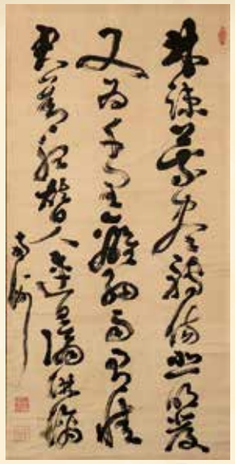
川口雪篷書「春夜落城聞笛」

周到な外交手腕

英国志

慶応2年6月17日に英国公使パークスが英国東洋艦隊のクーパー提督と共に薩摩から招待されて鹿児島に来港することになった。この時の大西郷の用意周到さは実に驚くべきものがあった。両人の滞在はおよそ1週間であったが、その接待費に約2万両という当時としては驚くべき巨費を投じての素晴らしい接待ご馳走であった。

南洲翁自身、英国のことを研究しただけでなく、島津の殿様まで英国のことを知らせるために、早くから京都にいた大久保に手紙を出して『英国志』を取寄せて、パークスが来るまでに久光公父子にも予備知識を与えるようにし、ご馳走の時の皿の出し方まで間違いのないようにと色々注意を与えていた。そして、先君斉彬公創設の磯の集成館を中心として、いち早く薩摩に導入した近代科学の機械施設、ガラス製品、兵器その他の施設の準備万端を見せて大いに英国人を驚かせている。こんな機縁でパークスと大西郷との交情は維新前後まで続き、薩英の関係に大きな役割を演じている。



西郷南洲書「奉送菅先生帰郷」

西郷南洲翁と菅臥牛翁

菅実秀は南洲翁に初めて会ったその時の模様を「一見して果して此の人なりと、交情、日々に厚く、夫子（実秀）の翁（西郷南洲翁）を敬する兄の如く、翁の夫子を親む弟の如し」と述べている。このとき南洲翁45歳、菅臥牛翁42 歳。実秀は満々と湛えていた水が一挙にほとばしり出たように、西郷に徹して問い、徹して求めた。西郷その人の深奥から学びとったものは、その後の実秀の太く逞しい心の柱となり、また『南洲翁遺訓』となって結晶したのである。実秀が直接西郷に学んだ期間は極めて短い（通算7ヶ月弱）。その人から学びとったものの深さは、時間ではなく、自己のすべてを挙げて学んだか否かによって決まる。西郷の勲業や名声に目を奪われずに、西郷その人の真髄に迫り、そこに打ちこんでいったその一人が実秀であった。

西郷さん札

西南の役に薩軍利あらず、敗走の途中、日向永江で到底勝算の見込みがないのを知り、卒160名に対して南洲翁発行の紙幣5円ずつを与えて開放した。それでこれら160名はついに官軍に降り捕虜となった。ついで官軍では、これらの捕虜を大分に移した。その途中捕虜の者たちは先に渡された紙幣を出し、商人らに向い「この札は南洲翁発行のものでこの後通用されないものであるが、品物を売ってもらうことは出来ないか」と問うと、商人らは「西郷さんの札なら御守りにするから何でも売ります」と言って、どしどし通用したという。すでに当時の人々がいかに西郷先生の徳を慕っていたか推して知るべしである。

西郷札

錦絵「上野山王台西郷隆盛銅像」

うちの人は こげな人じゃなか・・・

東京上野公園に6ヶ年の歳月を費やして建設された南洲翁銅像は、いよいよ明治 31 年 12 月 18 日に除幕式が行われた。その当時、鹿児島の武町の西郷屋敷に居た糸子未亡人は、遺児たちを連れて遥々上京し参列した。西郷従道侯の息女により静々と除幕の紐が引かれ、ぬっと現れた銅像を目前に仰いだ瞬間、糸子未亡人は思わず「宿ン人は、こげなお人じゃなかったのに…」と嘆声をもらした。すると隣席の従道侯が糸子未亡人の足をふんで「シーっ」とたしなめた。

その夜、従道邸で一族に対して「あの銅像は多くの人々が醵金して建てて下さったのだから、西郷家の者がかれこれ文句がましいことを言ってはなり申さん」ときつく言った。しかし糸子未亡人はやはり「うちの人は礼儀正しい人で、相手がどんな身分の人であっても、いつもきちんとした服装で応待し、驕ったり高ぶったりすることもなく、言葉遣いも丁寧でした。あの銅像はたとえ狩りに出られた時のお姿だとしても、あんな着流しの姿を皆様の大勢見なさる所にわざわざ建てて…」となかなか納得されなかった。